

「古典落語に学ぶよりよい男女関係」

落語家の柳家小団治師匠が一席

落語家の柳家小団治師匠が多摩キャンパスで、「よりよい男女関係の機微」を一席。

セクシュアル・ハラスメント防止啓発委員会の主催で6月27日、8号館の大教室で開かれた。



題して「古典落語に学ぶよりよい男女関係——ならぬものはならぬ」。

「どうもこんにちは、よろしく願います」

教室の後扉から大きな声をかけながら、小団治師匠の登場である。黒の着物姿

昭和42年中央大学経済学部卒。54年真打ちに。講談調の味わいのある語り口に定評がある。前口上代わりに、中大の思い出話。卒業式当日は単位が足りずに卒業証書も取らず、10日

遅れで取得、めでたく卒業となったそうである。柳家小さん師匠に入門したのも学生時代だった。若くして飛び込んだ落語の世界ときたら……と、エピソード話を披露した。

話が一段落したところで、教壇は舞台上早変わり、小団治師匠が座布団に座ると、あたりはいつの間にかやら江戸時代の夜の道。車屋と酔っ払った亭主との掛け合いが始まる。

「やあ、旦那！ ちよつとそこまで乗ってかない？」

「いやいやいいよ。すぐそこだから」
「近くてもいいよ、乗ってきな」

そこに二人がいるような

臨場感。声を使い分け、身振り手振りの妙に、会場からは笑い声が絶えない。

亭主の妻も登場し、妻「うちの亭主がご迷惑をおかけして……」

車屋「いやいや家の前から乗ったもんで」

妻「少しでいいので、お金を払わせていただきました」

亭主「いいんだよ！ うちの前からだから、払わななくて」

そんな場面を置きながら、亭主関白の旦那と妻の会話はしだいに「女性差別」をめぐるといっておはなし。

江戸時代の女性差別はひどかった。ひどいけれど、そんな亭主に負けていない妻の丁々発止の小気味よさ、滑稽さが見どころ聞きどころだった。

師匠の締めめりふがふるっていた。

「セクハラとスキンシップは相手の差、という川柳

がありまして、これをよく頭に入れておいてください。覚えておいてください。大切なことですから。そうすると、モテます」



セクシュアル・ハラスメント防止啓発委員会の「2005年度委員会活動報告書」によると、相談件数は26件、相談対応件数はのべ54件だった。この「少なさ」は、実際の被害発生が少ないというよりも、被害者が相談を控えるといった「被害の潜在化」もありうるとして、ひとりで悩まずに相談に来てほしい、と同委員会では呼びかけている。各学部事務室や大学院事務室、学生相談室などどこでも相談でき、電話（042-1674-3507）やEメール（shoudan@tamajs.chuo-u.ac.jp）での相談も受け付けている。

（学生記者 町田梨絵 11商学部4年）

皇太子殿下、来校される 全国大学国語国文学会に ご出席

中央大学後楽園キャンパスで6月開催された平成18年全国大学国語国文学会に皇太子殿下がご出席された。同学会は6月3日から5日まで開催。初日3日の記念式典に出席された皇太子殿下は、学会の開催を祝して次のような挨拶をされた。

「世界のさまざまな地域の人々と友好的な関係を保つていくために、まず自



らの伝統的な文化や生活様式に根ざした独自性や同一性を再認識し、そのうえでお互いの違いを尊重しつつ協働していくことが大切だと思います」

同学会は国語国文全般にかかわる広い分野の学者・研究者の集まりで、期間中広範な内容の講演、シンポジウムなどが行われた。

NHKが『Hakumonちゅうおう』特集 学生記者らハツラツと登場

「例えば箱根駅伝を取材してみても、駅伝が現役の学生にとつてもOBの人たちにとつても中大の魂をつなぐタスキになっているのだ

など実感しました。人の泣いている姿とか笑っている姿とか、感情のひだや思いをうまく伝えられる記者に

なりたいですね」（滝沢孝祐記者）

「すごいことに取り組んでいる人物やいろいろな出来事取材し記事にすることで、中央大学はこんなにすてきな大学なんだということも、学生にも外部にも発信していきたいと思いま

す」（池内真由記者）……。



『Hakumonちゅうおう』の学生記者らが6月29日、NHKテレビに登場し、記者の思いをハツラツとした表情で語った。放送されたのは、NHK総合テレビ午前11時台の「こんにちはいっと6けん」（関東エリ

ア）毎週木曜日の「キャンパス探険」コーナー。中央大学特集として『Hakumonちゅうおう』が紹介された。

その1週間前の23日、NHKスタッフによる撮影はおおごとだった。「いや、こんなに時間をかけて撮るんですね」と学生記者ともども驚いたくらい。

ペデ下での最近号の手配りシーンから、メインになる生の編集会議、ゲラの校正作業、学生記者らへの個別インタビュー、そして今号特集掲載の応援団（長）取材の様子まで。カメラ回しは、朝の10時にはじまり終わったのは夜6時、とまる1日がかりの丁寧さ、徹底ぶりだった。

番組では、ペデ下を通

りかかった学生も参加して「中央大学、オー」というかけ声をオーブニングシーンに、上手に編集された『Hakumonちゅうおう』のスペテVが8分余りにわたって放送された。

短いどころか、「8分がこんなに長いなんて」というのが当事者たちの共通した感想で、「でん、と出てたわねと、言われたりしてうるさいやら恥ずかしいやら」と、ある女性記者。

余録のように、8月31日にはNHKの同じコーナーの総編集で再登場。「夢を追いかける学生」というテーマで、映画監督の夢を語るテンプル大学ジャパンの学生、新聞記者や編集者をめざす中央大学学生記者、それに北京五輪にかける専修大学レスリング部の選手——3校の学生模様がダイジェスト映像で紹介された。番組アナウンサーの説明では、キャンパス探険で取り

あげた86校の中からセレクトしたのだそうだ。

「軽くプレッシャーをかけられた気持ち。でもこれを励みに」と、NHK出演はキャップの滝沢君をはじめ学生記者の背を一押しする効果もあつたようだ。

余談になりますが――。

「学生の目線を生かして、双方向の開かれた誌面編集を心がけている」という編集長(田中)コメントも流れましたが、じつはこんな話もしました。当日は、早朝にジーコジャパンがブラジルに軽くあしらわれてあえなくW杯敗退、というイヤな巡り合わせ。

「破れたとはいえ、『Hakumonちゅうおう』の理想は、管理サッカーのトルシエ(監督)型よりも自由な発想重視のジーコ型。ジーコジャパンのゴールは外れてばかりでしたが、学生記者チームは自在に動いて時折鋭いシユートを決め

ています」
そう称えたのですが、こ

の部分はあっさりカット、
でした。レトリックが過ぎ

たのでしょか。

(編集室)

「中大生ともっと交流したい」 韓国の協定校・淑明女子大生が来校

「学生記者に会いたい」

と7月19日、突然の訪問者。

やって来たのは韓国・淑明女子大生4人だ。同校は、2004年に締結された中央大学の協定校で、ソウル市内にある。

「中央大学の学生と、もっと交流をもちたくて来

日したんです」と、言語情報学2年の周可殷さん。

ニコニコ笑顔で、日本語もかなりお上手。

彼女たちは、ネット上に記事を書き、載せているのだという。サイトにアクセスしてみると、女子のソックス、制服などファッション関係の写真がいくつ

あった。ハンダルはサッパリなので、記事の中身は紹介できないが。

「季節に合わせて、

記事を変えていく。時々、いい記事が評価されると、大学の広報誌に載せてもらえるんです」と、うれしそうに話す。

『Hakumonちゅう

うおう』を見せてあげると「すごい。これ、もらってもいいですか?」と興味津々だった。

淑明大から交換留学生として中大で学んでいる学生は、現在2人だそうだ。「機会があつたら記事にしてくださいネ」

「冬ソナ」ブームらしい、日本と韓国の民間交流が盛ん。学生同士のつながりも深めたいものである。

◇

彼女たちの雑誌『Teens

Sookmyung>はhttp://teens.sookmyung.ac.kr. 淑明女子大生校 http://www.sookmyung.ac.kr.

(学生記者 白田彩乃 学部4年)

